

トマトすすかび病（病原菌：*Pseudocercospora fuligena* (Roldan) Deighton)

○ 被害と発生生態

本病は糸状菌による病害であり、葉が侵される。初め葉の裏側に不明瞭な淡黄緑色の病斑が現れ、やがて灰褐色粉状のかびを生ずる。

病斑はしだいに拡大して病勢の進展とともに、円形あるいは葉脈に囲まれた不整形病斑となり、灰褐色から黒褐色に変わる。葉の表面には、裏面よりやや遅れて不明瞭な淡黄褐色の病斑を生じ、かびを生ずるが、裏面に比べて少ない。被害葉は早期に垂下、巻いて縮れた状態となり、全葉が濃緑褐色のかびで覆われる。病徴は葉かび病に類似しており、肉眼での判別は困難であるが、分生子を顕微鏡下で観察すれば、細長い形状から葉かび病とは容易に判別できる

被害植物の残渣で越冬し、翌年の伝染源となる。多湿条件で発病しやすく、密植、過繁茂、換気不十分の施設栽培で発病しやすい。

すすかび病は、品種の葉かび病抵抗性の有無に関係なく発病する。

○ 防除方法

(ア) 耕種・物理的防除

- ・多湿条件で発病しやすいため、過繁茂を避け、施設内の換気に努める。
- ・発病葉及び被害残さは伝染源となるので、ほ場外に持ち出し適切に処分する。

(イ) 薬剤防除

- ・多発生すると防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。
- ・葉裏にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。
- ・薬剤の感受性低下を防ぐため、同一成分及び同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。



すすかび病の病徴（左：葉表、右：葉裏）

すすかび病菌の分生子